

罪は許せない でも治療受けて

卑劣な性犯罪は、ほかの犯罪に比べて再犯率が高いとされる。「依存症」が理由とみて、治療で防止しようとの動きが出始めた。

昨年12月25日、横浜地裁が元

中学校長(65歳)に懲役2年、執行猶予4年の判決を言い渡した。この男は27年間にわたり、フィリピンで1万2千人以上の女性

を買春していたという。

これほどではないにせよ、性犯罪を繰り返してしまった人は少なくない。

関東地方に住む50代前半の男性タカラアキさん(仮名)は、思春期のころから「年下をもてあそびたい」という気持ちを抑え

られず、身内や見知らぬ人にわいせつ行為や痴漢を繰り返してきた。成人してからは、児童買春のために海外に出かけたこともある。

「やめて」の声で
我に返つて自首

はアルコール依存症のみだった。かといって、長年依存してきた小児性愛から自分で抜け出すこともできなかった。性の問題を含めた自分が誰にも理解されない孤立感からヤケになり、ロープとカッターナイフをかばんに忍ばせ、遊んでいた子どもに声をかけた。そのまま個室に連れ込み、子どものズボンを下ろそうとしたとき、「やめて」と声を上げられ、我に返つた。

「自分はおかしいのではないか」と、性の問題を訴えたが、診断入ってしまった

昼夜の行事が終わると往復4時間の道のりを運転し、風俗店に通う日々が始まった。プレー後には襲う寂しさを打ち消すために、また別の店に通う。多いときは10時間に5店をはしごした。

金融にまで頼って借金が膨らんだ。それでも断ち切れない時期が1年半ほど続いた。

小児性愛、のぞき、痴漢、盗撮、露出、強姦など、特定の性

殺してしまうかもしれない」交番に自首し、ほどなく逮捕された。犯罪までのいかなくても、止められない性衝動に悩む人がいる。中部圏在住のサトシさん(仮名、40代後半)の場合、風俗店通いがそれだった。

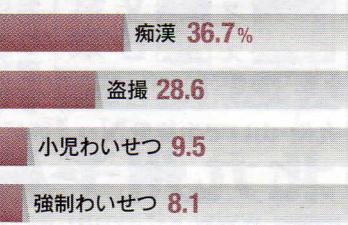
生活が一変したのは、宗教関係の職を継ぐことになった15年ほど前。うつ病を発症し、ストレスを解消するために休もうとしたが、急な仕事が入ってダメになつた。そのとき自分が奴隸のように思えてしまい、信者から受け取つた浄財を持ってファンションヘルスへ行つた。風俗嬢のぬくもりに、経験したことのない「癒やし」の快感を得た。

「あれで自分の中のスイッチが入つてしまつた」昼夜の行事が終わると往復4時間の道のりを運転し、風俗店に通う日々が始まった。プレー後には襲う寂しさを打ち消すために、また別の店に通う。多いときは10時間に5店をはしごした。

井裕輝氏によると、「自分がやめたいと思つても、それができないまま状態は『性依存症』と呼ばれ、国際的な診断基準もある。性依存症を診る精神科医の福井裕輝氏によると、「自分がやめたいと思つても、それができないまま状態は『性依存症』と診断される」。

女子高生の制服などを盗み、昨年末に逮捕されたお笑い芸人(44)は、性的欲求を満たすため同様の盗みを繰り返したといい、自宅から約600点が押収された。これも性依存症が疑われるケースだ。

有罪判決から5年以内の性犯罪再犯の割合



依存の裏に不安 思い込みも強く

原因は心の問題、とソーシャルワーカーの吉岡隆氏が言う。

「不安や寂しさ、怒りなど、その人が強く心に抱えるものがあると依存症になりやすい。依存には否定的な感情を鎮静、麻痺させる効果があるからだ。しかし、それを続けていると、その後には死が待っている」

遺伝や脳機能障害の可能性も





否定できない。「性犯罪の常習者には、扁桃体など脳の一部に血流低下が認められた」(福井氏)ケースもあるからだ。

2015年の犯罪白書によると、強姦が強制わいせつの服役者で、以前にどちらかの罪を犯したケースは最大45%。痴漢や盗撮では、性犯罪の前科が64%まで跳ね上がる。

性犯罪事件の裁判を手掛ける林大悟弁護士の元を訪れる加害者は、ほとんどが再犯者。前科10犯のケースもあった。

「本人はやめたいと思つても運動を抑えられない。だから依存症には治療が必要なのです」

性犯罪の常習者は、「痴漢をされると女性は喜ぶ」「盗撮は誰も傷つけていない」など特有の思い込みを持つ傾向がある。こうした考え方のゆがみに気づかせるのが認知行動療法だ。性欲を減退させる薬の抗アンドロゲンの投与を組み合わせれば、効果は増すという。

加えて、多くの医師やカウンセラーが有効だと勧めるのが、性依存症の人たちを集めた自助

「依存症になるまでの時間の蓄積を考えたら、週1度の通院治療では簡単には治らない。自助

グループで同じ悩みを持つ仲間が支え合い、回復していく姿を見るのが、患者の希望につながる」

もちろん、自助グループとて完璧ではない。一度顔を出したきり来ない人や、再び罪を犯してしまう人もいる。「自分一人で治せる」と思つては、自らの性衝動を打ち明けること抵抗を感じ、利用しようと思

タカアキさんとサトシさんも、自助グループに通い始めてようやく性依存症から抜け出す光が見えてきた。いまも定期的に集まりに顔を出し続ける。そこから多くのことを学んだ。

「小児への興味が完全になくなつたわけではないが、繰り返さない信念ができた」(タカアキさん)

「風俗嬢のぬくもりはたまに欲しくなる。そんなときにどうすればよいかを知った」(サトシさん)

「自らも性依存症になり、依存症には治療が必要なのです」

元大統領も告白 治療で先行く米仲間の回復が光

わないう人がほとんどという。

性依存症の治療が進んでいるのが米国。ビル・クリントン元大統領など著名人が告白したことで、性依存症が広く知られるようになった。

カリフォルニア州在住の心理学者西尾和美氏によると現在、米国で性依存の治療を求めている人は人口の3~5%という。

「心理療法と自助グループの組み合わせで治療をします。ある程度の規模の町なら複数の性依存の自助グループがあり、患者の配偶者のケアを目的としたものも数種類に分かれています」

日本政府も06年から「性犯罪者処遇プログラム」を始めた。

性犯罪者の受刑者と保護観察対象者に、認知行動療法をベースにした内容を週に1~2回、最大8ヶ月受講させる。受講者数は、受刑施設だけですでに5千人近くに達し、受講者の性犯罪再犯率は、非受講者に比べて約5分の1に下がった。

とした上で、こう強調する。

「でも、新たな被害者を生まないためにも、治療を受けてほしい。何もせずのうのうと社会に復帰しているとしたら、それこそ悔しすぎる」

福井氏も訴える。

「刑罰を重くしたぐらいでやめられる人なら、最初から性犯罪に手を染めない。再犯を防ぐことを真剣に考えたら、加害者治

か、という点だ。保護観察中の場合、プログラムは医師なしで、回数も5回と少ないため、「個々の病態が分からず、適切な処方もできない」との指摘もある。

こうした疑問に法務省は、「再犯の危険性を具体的に考えさせなど現実的な対処をしている。

臨床心理の専門家が定期的に施設を訪れ、プログラム実施者に助言指導も行っている」(矯正局)と話す。

さらに、民間の体制はそれ以上に弱い。性依存の専門知識を持つ医師は日本ではごく少数。

自助グループにしても、米国のプログラムを導入するなどして、三つの団体とその支部が大都市を中心にあります。過ぎない。

性依存症の治療が進まなければ、性犯罪の再犯リスクは高いまま。自らも性犯罪被害を受けた経験から被害者の声を聞き続ける活動を行う小林美佳氏は、

「加害者が人を傷つけたことは許せない」



性犯罪への警戒を呼びかける警察官。防犯意識を「磨いて」という願いを込めて歯ブラシを配った/2015年9月、福岡県春日市